

D-41 転移性肺腫瘍に対する外科療法の検討—原発癌腫、肉腫別に検討して—

長崎大学医学部第1外科

○原 信介、綾部公懿、川原克信、田川 泰、
岡 忠之、辻 博治、田川 努、中村昭博、
森永真史、村岡昌司、山本 聡、富田正雄

【目的】転移性肺腫瘍に対する外科療法の適応について原発癌腫、肉腫別に、転移個数、転移巣の大きさ、肺転移巣出現までの期間（DFI）別にその遠隔成績より検討した。【対象】1990年6月までに原発癌腫62例、肉腫17例の転移巣の単発巣57例、多発巣32例に対し肺切除を施行した。年齢は14才より79才、平均49才、男性38例、女性41例であった。【結果】癌腫は転移巣単発49例、多発21例、肉腫は単発8例、多発11例と肉腫に多発例が多かった。多発例でも癌腫は2個が67%を占めるのに対し、肉腫は2、3、4、5個以上と幅広く等しく分布していた。転移巣の大きさは、癌腫で3cm以内が67%、肉腫で68%と差はなかった。DFIでは、癌腫では2年以内が59%、肉腫82%と肉腫例が明かに短かった。生存率の検討では、癌腫では、転移巣の長径が3cm以下が以上より有意に良好であったが、転移個数による差はなかった。肉腫では、転移巣の大きさ、転移個数による差はなかった。癌腫ではDFIによる差は明かではなかったが、肉腫ではDFIが2年以上で長いほど予後が有意に良好であった。【考察】以上より、癌腫では個数に関係なく3cm以内、肉腫ではDFIが2年以上では積極的に外科療法の適応はあると思われた。

D-42 転移性肺腫瘍に対する手術療法

とくに乳癌肺転移手術症例について

日本大学医学部第2外科

○北村一雄、大畑正昭、飯田守、大森一光、中岡康、
伊良子光正、中村士郎、小笠原弘二、並木義夫、
村松高、長坂不二夫、西村理、瀬在幸安

転移性肺腫瘍に対して、最近では多発性肺転移症例に対しても積極的に手術療法が選択されるようになったが、その成績は未だ不良である。今回、教室例のうち、とくに乳癌肺転移手術症例について検討を試みた。

対象は、1990年末までに経験した転移性肺腫瘍切除例98例のうち乳癌肺転移手術例の10例であり、平均年齢は53.1±10.7才であった。

TFIは36カ月以内の症例が5例で、肺手術が先行した症例も認められたが、3例は60カ月以上であった。

転移巣は孤立性7例、多発性3例であり、手術術式は肺摘除1例、肺葉切除6例、部分切除3例であった。縦隔郭清を施行した症例は3例であるが、samplingを含めリンパ節を摘出した8例のうちN₀3例、N₁2例、N₂3例とリンパ節陽性率が高い傾向にあった。

累積生存率では、5年生存率18%と不良であった。

最近、乳癌の治療として縮小手術が好まれる傾向にあり、また比較的化学療法が有効であるとされるが、肺転移手術症例を検討するとリンパ節陽性率が高く、手術成績も不良である。乳癌手術後は長期にわたる経過観察が必要であるが、肺手術時には縦隔郭清が必要であり、肺葉切除を施行すべきである。

D-43 肺腫瘍陰影に対する開胸生検手術症例の検討

昭和大学医学部外科¹、第1内科²、放射線科³

○野中 誠¹、門倉光隆¹、谷尾 昇¹、山本 滋¹
椛澤由博¹、高場利博¹、中島宏昭²、櫛橋民生³

【目的】術前に確定診断を得られなかった肺腫瘍陰影の特徴を明らかにするため、当科における開胸生検例を検討した。【対象】過去5年間に施行した、縦隔・食道・横隔膜・胸壁疾患を除く呼吸器疾患手術例204例のうち、肺腫瘍陰影に対して開胸生検を施行した20例（9.8%）を対象とした。【結果】男性14例、女性6例、平均年齢は51歳。呼吸器症状による発見は5例のみであった。腫瘍陰影発見時に悪性所見を認めず、経過観察（平均23カ月）となっていた症例は11例で、これらは腫瘍径の増大・腫瘍マーカー値の上昇・抗結核剤に反応しないなどの理由で精査治療目的入院となった。腫瘍径は13～55mm（平均28mm）で、画像所見から悪性疾患を強く疑った10例と、悪性疾患を否定し得なかった10例に対して開胸生検を行った。術中迅速診断に従い、肺癌には肺葉切除、良性疾患には核出術を中心とした術式を選択した。術後組織診断は腺癌10例（高分化7、中分化1、低分化2）、結核腫5例、その他の良性疾患5例であった。術前悪性を強く疑った10例のうち3例は良性疾患でいずれも結核腫であった。また術前良性とも思われた10例のうち3例は腺癌であった。【結語】確定診断がつかず、悪性も否定し得ない肺腫瘍陰影に対して積極的に開胸生検を行うことは意義のあることと考えられた。

D-44 開胸生検により診断された肺癌症例の検討

弘前大学医学部第一外科¹、青森労災病院外科²

○谷 明夫¹、丸山 章²、糸矢平む¹、対馬敬夫¹、相内 晋¹、
藤田 孟²

【目的】術前に組織診断が得られず、開胸生検により診断された肺癌症例の臨床像を検討した。また、肺良性腫瘍で最も多い肺過誤腫との比較を行なった。

【対象】1986年より1990年末までの5年間に青森労災病院外科で手術を行なった肺癌症例65例のうち、術前に確定診断のつかなかった8例（12%）と、同期間に経験した肺過誤腫9例を対象とした。

【結果】開胸生検により診断された肺癌8例のうち6例は高分化型腺癌であり、これらの病期は全てStage Iであった。他は、低分化型腺癌Stage III Aが1例、肺芽腫Stage IV 1例と進行癌も認められた。また、8例中6例が女性であり、調査期間の全肺癌症例の男女比と逆転した。部位別には、8例中7例が下葉原発であった。肺過誤腫9例は、全例開胸生検により確定診断を得たが、画像診断上8例は術前に良性腫瘍と考えられており、1例のみ肺癌が疑われていた。9例中6例が女性であり、部位別では6例が下葉に存在した。腫瘍最大径は、肺癌1.0～6.0cm（平均3.1cm）、肺過誤腫0.7～3.0cm（平均1.8cm）であった。年齢では、肺癌47～75才（平均65.4才）、肺過誤腫26～63才（平均45.8才）と、肺癌の方が約20才高齢であった。発見動機では肺癌で1例のみが症状を有したが、他は検診あるいは他疾患の治療中に偶然に発見されたものであった。